



TITLE:

<特集: 京都と環境のつながり4 現場レポート>京エコロジーセンターと環境教育

AUTHOR(S):

CITATION:

<特集: 京都と環境のつながり4 現場レポート>京エコロジーセンターと環境教育. 公共空間 2014, 12: 15-16

ISSUE DATE:

2014

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/197687>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控え下さい.

【特集4 現場レポート】

京エコロジセンターと環境教育

公共政策を志す私たちにとって、どういった形で公共政策に携わるのか決めることは大きな分岐点となります。かつて日本は行政主導の国だとされていましたが、今や公を担うのは行政だけではなく、NPOやボランティア、民間企業など、あらゆる立場から多様な関わり方が求められる時代に変化しました。

従って、国際会議のレベルで地球温暖化の数値目標を策定することだけでなく、実際に現場で汗を流し、多くの人々を巻き込んでいくことも大切な取り組みです。特に環境問題は、一市民として日常生活の意識から変えていく、ボトムアップの動きが活発な分野です。そうした文脈を踏まえ、今回は環境教育に取り組む「エコセン」を取材しました。

エコセンとは

京（みやこ）エコロジセンターは、京都市伏見区にある環境学習と環境保全活動の拠点です。

「エコセン」の名で親しまれ、京都市の小学生の環境学習の中心地であり、環境活動に携わる人的ネットワークの核となる場所でもあります。エコセンは一九九七年の地球温暖化防止京都会議（COP3）、

京都議定書採択を記念して、二〇〇二年に開館し、今年で十三年目になります。今回エコセン職員である新堀春輔さんに取材に応じていただきました。

エコセンは、館内における環境教育に関わる展示とプログラム、環境ボランティアの育成、地域における環境活動支援等を事業の柱としています。環境教育については、主に小学生を対象としています。子どもから大人まで学べるよう工夫を凝らした展示で、自然に環境問題に関心を持つてもらえるような工夫がなされています。

二〇一四年三月まで開催されていた企画展「ゴミック『廃貴物』展」は、エコセンの館長であり漫画家でもあるハイムーン先生による愉快なマンガ展です。京都市指定ごみ袋のキャラクターにもなっている「こごみちゃん」も登場し、廃棄物のリサイクルの重要性がコミカルに表現されていました。

また、京都市の小学四・五年生の多くが環境教育のためにエコセンに訪れています。新堀さんは、環境に配慮することが、我慢することではなく、自分たちにできることは何か考えることが大切だと考えます。答えがない問題について、一緒に考えて考えるきっかけとなることを、エコセンの展示に込めています。



企画展「ゴミック『廃貴物』展」

(2014年3月で終了)

後者の環境ボランティア（エコメイト）は、実際に環境問題に取り組む大人を対象とした活動です。応募の上、養成講座を修了したエコメイトは、自ら環境に関わる活動を主導することを期待され、そのために三年間エコセンで様々なトレーニングを積みみます。エコメイトは既に十四期を数え、卒業生の中から、高速道路の壁面の緑化活動や、省エネ技術を広める活動、子

ども向けに出前教室を行う活動などが生まれています。

環境教育の新しいあり方

そうした環境教育が必要とされている背景には、豊かになった人の暮らしから、「繋がり」が失われているという課題があると新堀さんは指摘します。「今の世の中では、自分と環境・社会との繋がりを意識しなくても生活ができます。しかし、毎日のくらしの中での様々な選択は全て環境とも繋がっていると考えています。何十年先の持続可能な地域社会を見通したとき、自分の行動がどうあるべきなのか、向き合う必要がある、そう考える人を増やしたいと思っています。」

しかし他方では、環境に関心を持ち、配慮した行動を続けることは簡単ではありません。自分のことだけを考えていた方が、ある意味楽なのです。そうした環境教育が抱える困難には、新しい方向性が打ち出されています。

「以前の環境教育は、最悪のシナリオを提示して、危機感を煽るようなものが中心でした。このままいくと大変なことになる、我慢しなければ、という動機付けです。しかし今は、環境を意識し繋がりを大切にしたら暮らしが、むしろ豊かだという視点を打ち出すようにしています。」

危機感を煽るようなものでは響かない人の方が多い。だからこそ、季刊誌でそうした暮らし方を実践されている方を紹介したり、ワークショップを開催したりしています。」

エコセンが主催するワークショップの一つである、ひとときフェスタは「まちで森とつながるくらし」をテーマに、様々な体験を通じて、普段の暮らしと自然の繋がりに気付くきっかけになるよう工夫されています。エコセンの環境教育を受けた子どもたちは、自然と環境配慮を商品の一つの価値として認めようとする考え方を持つ世代になるのかもしれない。



編集後記

新堀さんが最も大切にするのは、「当たり前を疑う」姿勢です。「目の前にある商品が、どうしてそんなに安いのか、どうやって作られている

のか疑ってみることで、社会のゆがんだ構造に気づき、私たちが消費するもの全ては自然から頂いているものだということを理解することができます」と訴えます。

新堀さんのルーツは、高校時代を過ごした南アフリカや、大学卒業後に経験した青年海外協力隊で行ったセネガルにあります。日本では当たり前でない状況を目の当たりにして、その時に「繋がり」の重要性に気付いたと語ります。アフリカの経験が新堀さんに大きな影響を与えたように、エコセンでの活動も、より多くの人々に豊かさについて考え直すきっかけとなり、より大きなうねりとなって社会全体を変えていくのではないのでしょうか。(文責 森俊貴)

京エコロジーセンター

COP3（地球温暖化防止京都会議）を契機として2002年に京都市環境保全活動センターとして開設された、京都市の環境学習・環境保全活動の拠点施設。

新堀 春輔

(しんぼり しゅんすけ)

1982年生まれ。高校時代、南アフリカ共和国に留学。大学で社会福祉を学んだ後、青年海外協力隊としてセネガル共和国にて幼児教育・環境教育の活動を行う。2011年より京エコロジーセンター。